# 埴谷雄高作品集

河出書房新社

11

私の埴谷像——諸田和治

埴谷さんとナスターシャ・フィリッポヴナ——三枝和子

文体が世界を変える——平岡篤頼

〝白昼〟の埴谷雄高——清水哲男

埴谷雄高作品集11　©1979

一九七九年八月一〇日印刷　一九七九年八月二〇日発行

著者——埴谷雄高

装画——駒井哲郎　装本——杉浦康平

発行者——清水　勝

発行所——株式会社河出書房新社
東京都新宿区住吉町九五　電話　東京　三五五—五三二一営業　三五五—五三二一編集　振替　東京　〇—一〇八〇二

印刷者——多田　基　印刷所——多田印刷株式会社

製版印刷——凸版印刷株式会社

製本所——小高製本工業株式会社　定価は函・帯に表示してあります

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

紀行文集

目次

姿なき司祭——ソ聯・東欧紀行

9——18 姿なき司祭
19——46 ドストエフスキイと運転手
47——64 《民衆》の顔
65——90 セルゲイ君
91——115 ワルソー・ゲットー
116——134 レーニン・ブールヴァール
135——153 魔法の町
154——178 町のなかの国境

欧州紀行

181—188 見知らぬ空港で
189—194 キルケゴールの墓
195—205 身分制の壁
206—213 ハイデルベルクの花火
214—217 スイスでの遺失物
218—221 ヨーロッパの記念碑
222—225 「魔法の森」の啓示
226—231 首のない像
232—248 三組の花嫁
249—266 米の味
267—274 自我の復活 —小川国夫

275—290　解題—白川正芳

# 小——ソ聯・東欧紀行

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 姿なき司祭

夜汽車の場合でもそうであるけれども、座席によりかかつたままの姿勢ではとうてい眠れず、自宅で寝ると同じく長く横にならなければ眠れぬたちなので、私は、そのとき、睡眠剤をのみ、たまたま空いている三人分の座席に横になつていたが、頭の芯に数枚の薄暗い膜がかむせられた夢うつつの境でぼんやり目覚めると、飛行機は着陸するとき、異変を思わせる不規則なバウンドをつづけて、私の軀を、縁だけ固まつたジェリーのように異常に内部攪乱しながら、大きく振りまわし、弾ませたのであつた。やはりきたかな、と瞑目したまま背中に伝わつてくる小刻みな横ぶれと大きな上下動のまじえられた振動を味わつていると、がくりと前のめりしながら飛行機はやがてとまつた。

――どうせ僕がゆくのだから、飛行機の故障くらいあるでしようね。

不吉な予感といつたほどの暗い切迫感などなく、日頃からいわば「へま」ばかりを永遠の伴侶にしている自身にあらかじめ警告の鞭をあてておくといつた四分の三くらい冗談の気分で、或る雑誌の対談のため訪れたA君に、出発前、私はそんなふうに述べたのであつたが、その冗談を傍らに黙つて立つて窺つている死の神に苦々しく聞きとられて、この暁方近い暗いカルカッタ空港でついに実現されるのかな、と私はそのとき閃くように思い返した。

確かに、真夜中すぎの空港の暗い滑走路は、冥府の入口に相応しい空虚な、淋しい、孤独な場所である。現代には現代ふうな冥府の入口がやはりできたものだな、と考えながら、なお瞑目している私と同じく、理

由が解らぬ不安のなかで凝つとおし黙つている薄暗い機内の乗客に、やがて、車輪に故障が生じたので、代りの部品の到着まで、当地のホテルで待つていただきたいというアナウンスが告げられたのであつた。

第一番目の目的地であるモスクワへ着かない前に起つたこの偶然の出来事は、いつてみれば、或る特別な色合いの陰翳を私の旅行のはじめにつけることになつたのであつた。

私達に与えられた旅程は、東京、モスクワ直行便が満員だつたため、はじめから東京、カラチ、モスクワという変つたコースであつたが、このカルカッタでの思わざるアクシデントはカラチでの乗換便を失わせ、さらにイスタンブール、ソフィア、モスクワという「より変つた」経路を私達に与えることになつたのである。そして、まずヨーロッパの入口まで達してからヨーロッパアジアへ戻るといつた、いわば東半球大圏コースとでも呼ぶべきこの長い経路の採用によつて、私達のモスクワ到着は一日遅れたのであつた。

その間、暁方近く、カルカッタのホテルへ向かうバスから切れ目もない移動撮影のように眺めることになつた町の歩道の上に裸かで寝ているひとびとの数限りもない群れ、暑さと貧困に由来するそのカルカッタの《アジア的睡眠様式》について、また、イスタンブール空港で映画物語さながら遠い滑走路にあるブルガリア航空の三十人乗りの小さなプロペラ機まで空港の自動車を走らせて僅か出発数秒前にまさに間一髪乗りこんだときの不安と僥倖について、さらにまた、皆目様子の解らぬソフィア空港の雑踏のなかで出入国を扱う役人からパスポートを取りあげられてしまつた絶望的な苦境についてなど、まことにことは多かつたけれども、それらは別の機会に触れることにして、カルカッタでの思わざる飛行機事故がひき起したモスクワ到着の一日遅れが、社会主義国で私達にもたらした出来事をまず記することにする。

上昇しはじめると背中が座席に斜めに傾いて押しつけられたまま軀が起せなくなるほど強烈な推力をもつたジェット機TU一一型にソフィア空港から運ばれて広いモスクワ空港についたのは、午後二時半近かつた。

ロシアでは、何処のホテルに宿るべきか、インツーリストの指示によらなければならないので、すべてのことのはじめはインツーリストのカウンターからはじまる、といつた具合なのであつた。

ところで、高い大きな硝子張りの建物であるモスクワ空港の一隅にあつたインツーリストの部署は、いつてみれば旅行客が到着したときだけの臨時出張所といつた恰好で、僅か二つのテーブルを横につなぎあわせ、その向う側に三人の若い係員が腰かけているといつた簡素なものであつた。私とT君が、そのテーブルのはしに腰かけているもみあげの長い、眼鏡をかけた若い男の前にゆき、カルカッタでアクシデントがあつたので遅れたと述べながらパスポートを差しだすと、派手なネクタイをつけたその若い男は、すぐ備えつけのリストを出して調べながら、書類をととのえ、即座に私達のホテルを指定するかのごとく見えた。そのとき、彼の隣りにいた、やや年輩の小肥りの男が彼に何か注意すると、注意されたもみあげの長い若い男は、急に仕事を中止してしまい、不審に思つた私達の注視のなかで、年長らしい小肥りの男が二つのパスポートを手にもつて立ち上ると、百メートルくらいある大きなロビイをはずれまでゆつくり横切り、そのつきあたりの一番奥にある部屋の扉をあけてなかへはいつてしまつた。

そして、それからの事態こそ、私とT君が、その後、あまりにも屢々、顔を見合わせながら繰り返すことになつた《カフカ的状況》のはじまり、なんら説明もないためどうしてそこにそうして何時までも長くうちすてられたままになつているのか、深海の底の古い石のように、皆目見当もつかぬ不思議な状況のはじまり、なのであつた。

十数分たつと、映画のロングショットの場面のように、遠い広間の隅の扉を開いて先程の小肥りの男がでてき、脂肪がつきかけているための自然の振舞いなのか、腰を軸にして上体を一歩ごとに高く揺すりあげ前へ踏みだす両足の調子をとりながら、こちらへゆつくり歩いてくる姿が目にとまつた。長い時間をかけて近づいてくるこのやや年輩の男の黒い上着の下は襟なしの赤シャツで、ネクタイをしていないことに私は気づいた。そして、待ちもうけている私達の前へ近づいてきた彼は、普通の口調で、「ちよつと待つていてくれ」といつたのであつた。

言葉は単なる符牒にすぎず、与えられた状況のなかで恐ろしいほどかけはなれたさまざまな異なつた内容

をもち得るという事態について、私達はまだこの国で何も経験していないのであつた。けれども、それ以後幾度もそのなかに置かれ否応なく納得せしめられることになつたこの《待つている》事態こそ、知つてみれば、官僚主義を支える最後の柱にほかならなかつたのである。

恐らく、ロシアの民衆も、はじめはそれに苛らだち、反抗し、弾劾したのであろう。けれども、長い、長い、長い全面支配の大きな網の目のなかで、ついにこの官僚主義の頑固な枠のなかに組みいれられてしまい、ついには、手綱なしでは何処へもゆかず、直ぐ指定の白墨の円のなかに立ち並ぶおとなしい家畜のごとくに、彼等は《待つこと》に慣らされてしまつたごとくであつた。《待たせること》と《待つこと》がさながら電光と雷鳴の随伴する自然現象のごとくに融合したその長い、長い、長い、朝から夜中まで繰り返された慣行は、待つべき理由の明らかなときも、また、怖ろしいことに、何ら理由も明らかでないときにおいても、無言の、愚かしい無表情のなかで、ただひたすら待つていることを彼等に「義務」づけてしまつた、と敢えていわなければならない。それは、暗い意識の奥底に、肉体の隅の皮膚の一片一片に生得の資質のごとく染みついてしまい、たとえ、政府に関係することでなく、日常生活の瑣末事においても、彼等はぼんやりした鈍い無気力のなかで「自由意志」によつて《待つこと》を繰り返すようになつてしまつたのである。

その後の私達は、ホテルでも、レストランでも、商店でも、タキシー駐車場でも、絶えず《待つている》ひとびとの無生気な「善良」な表情に屢々直面しなければならなかつたが、このモスクワ空港ではまだ《待つている》ことの隠れた意味を知らなかつたのである。

「ちよつと待つてくれ」と告げられてからすでに一時間近くたつた。次第に波立つてくる苛らだちを抑えきれなくなつた私が簡素なテーブルを二つ並べたインツーリストの臨時出張所へまた近づくと、一番はしにいた長いもみあげの若い男はすでにいず、また、反対側のはしも空席で、先程私達のパスポートをとりあげて遙か遠い奥の部屋へはいつた小肥りの赤シャツだけがただひとり両手をポケットにつきいれた変つた姿勢のまま前屈みに書類を見ていたが、「まだ時間がかかるのか」という私の苛らだつて棘のある語調に視線をあ

げたものの、たつた一人のこつた最後の窓口である彼は、先程とまつたく同じことを、同じ調子で繰り返しただけで書類に目をおとしてしまつた。

白く長く一直線につづいた道路や、高い樹立ちの列や、遠い原野など、「ロシア的郷愁」をそそる風景が、大きなよく磨かれた透明な硝子を通して空港の外に見えるロビイの中央の長椅子に腰をおろした私は、不機嫌な苛らだちが胸の何処かの隅で破れて、もはや、腹だたしさへ移つてゆくような気分を覚えた。私の苛らだちには理由があるのであつて、到着が一日遅れたため、まだのこつているこの午後の時間を全部使つて、いまは博物館になつているというドストエフスキイの生家を訪れる予定をあらかじめたてていたのに、それが困難になりそうに懸念されてきたからである。

ところで、ソフィアからの私達の飛行機がこの空港に到着する最後の便だつたらしく、赤や青の鮮やかな色彩で飾られた枡がたの土産物の売店や半円形の窓口だけが覗かれる銀行の前をそれまで往来していたひとびとは何時のまにかいなくなつてしまい、広い空港の果てまで見渡しても不思議なほど乗客の姿は眺められず、私達だけが急にのこされてしまつた無人の空港の風景は、いいしれぬ不安をかもしだすように思われた。

さらに三十分たつた。

青空に白い雲が浮んで高い樹の梢にかかつている空港のそとのロシア的風景から眼をもどして立ちあがつた私は、インツーリストの臨時出張所へまた近づくと、こんどは怒りの気色も隠さずに、「何をしているのか。どうしてこんなに時間がかかるのか」と訊いた。このがらんとした広い空港のなかにのこつている唯一の頼るべき相手である赤シャツは、先程からその姿勢をつづけていたのかどうか解らないけれども、ポケットに両手をいれたまま、ゆつくりと目をあげると、「まだ待つてくれ。チーフが決定する」とこれまた短く答えた。

この「チーフが決定する」という新しい事態が出現してきたとき、私は、はじめて、不意と、ぼんやりした薄暗い輪郭をもつた国家権力の目に見えない罠にかかつているかのごとく感じて、誰もそこに立つていな

い売店や食堂のある空港のはずれまでもう一度仔細に眺め渡した。

この待合室を兼ねたロビイになつている大きな広間には、二階の到着室から降りてくる高い階段が二箇所あつたが、私がその近い一つに目をやると、階段を支えている大きな角柱の蔭に、目の荒い背広を着た、恰幅のいい、四角い顔立ちをした中年の男がこちらを見るともなく眺めながら立つているのに気づいて思わず胸の暗い奥で何かが高く叫んだ。想い返してみると、レスリングの選手を思わせるこの恰幅のいい、顎の張つた男は、私達が最初にインツーリストの簡素なテーブルの前に立つたときからそこにいたのであつて、見た瞬間に直覚するというより、漠然と暗い想いをこらしたあとにようやくぼんやり推知するといつた型の、直観型ではない私も、やつとそのとき、夏のモスクワで背広をきちんと着てネクタイまでしめているその頑丈なレスラーふうな軀つきの男がまぎれもなく空港づきの「私服」なのだと気づいたのであつた。そして、そう不意と気づいたとき、それが何処の国にせよ、権力機関の一員にそれとなく見張られている暗く忌まわしい不吉な感じと同時に並んで、ここに待つていろとそちらからいわれたからこそ誰もいなくなつてしまつたこの空港のロビイにぼんやり所在もなげに待つているのであつて、そうした私達がそれとなく監視されるのは筋道がまさに逆ではないか、と急に無性に腹立たしくなつてくるのであつた。どちらかといえば、日頃は、「おとなしい」らしい私も、ドストエフスキイの生家訪問の時間が無駄に失われてゆくことにいわば無数に泡だつ沸騰点に達するほど心の動きが激しく波立つて、長椅子の隣りに坐つているT君に、こんどは君が行つてきてくれ、とぶつきらぼうにいつた。あからさまな暗い不機嫌をかくさぬその私の昂ぶつた気配がT君のやはり重苦しく、鋭くささくれ立つた神経を刺激したのだろう。こんどは代つてT君が赤シャツの前へたつと、たつた一組とりのこされた私達のとめどもない困惑ぶりに同情したのか、それとも、何時までたつてもとうていあきらめそうもないしつこい間歇攻撃がうるさくなつたのか、もう一度たち上つた彼は、彼の特徴である腰を軸とする前揺れの調子をとりながら、広いロビイをゆつくり横切つて、一番奥にある部屋の扉のなかへはいつていつた。けれども、暫らくして姿を現わした彼は、喜ばしい変化を期待してまちもう



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com